
鉄拳2 Another Resurrection

からあげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄拳2 Another Resurrection

【Zコード】

Z8210E

【作者名】

からあげ

【あらすじ】

世界をまたに駆ける若きスペランカー、アルベルト（Albert）。自然を愛し、自然と向き合い、彼は冒険というものに己の存在、そして命の尊さを学んでいく。そんな中、一人の自然保護団体W.W.W.Cの密輸動物監視官との出会いがアルベルトを戦いの道へと誘う。そして、それに呼応するように、三島財閥が主催する【The King of Iron Fist Tournament 2】が開催される。

鉄拳2ストーリー（前書き）

この小説は、鉄拳2を舞台としたお話です。

ゲームとは、事実や舞台、時間軸、時系列にかなりの違いがござります。

前もってご承くください。

鉄拳2ストーリー

世界に名を馳せる巨大財閥の長である三島平八。

彼が主催する世界規模の格闘大会は、いつしか「The King of Iron Fist Tournament」と呼ばれるようになっていた。

前回大会から2年の月日が流れ、今再びあの闘いが始まろうとしている。

今回の大会は、行方不明になった三島 平八に代わって現三島財閥頭頭である三島 一八の主催による大会である。

前回から引き続いての出場者は自らの技に更なる磨きをかけ、また世界各国から武術に精通した強者どもが新たに名乗りをあげている。

最強の拳、「鉄拳」を持つ屈強な者どもが今ここに・・・

namco公式ストーリーより転載

08/08/09 00時29分

鉄拳2ストーリー（後書き）

この作品は、鉄拳のストーリーが大好きな私が、鉄拳2では語られなかつたお話を好き勝手に作ったものです。

前書きにもありましたが、かなり事実と違う部分も多々ございました。

WIKIや公式ストーリーを読み漁り、できるだけ事実の相違がないように努力して書いていこうと思います。

駄文乱文でごめんなさいですが、どうか読者様のご想像と照らし合わせ、もうひとつ鉄拳ストーリーとして楽しんでいただけたら幸いでございます。

どうぞよろしくお願いいたします。

伝説 第1話（前書き）

【登場人物】

アルベルト（Albert）

本編主人公。通称【アル】

正義感が強く、自然を愛するスペランカー。
八極拳の使い手でもある。

ユルゲン（Jürgen）

アルの八極拳の師匠であり、スペランカーチームのリーダー。
人生とは自然と共にある という信念を持つ。

イヴァン（Iwan）

スペランカーチームの一員。
軽い性格である。

ギド（Guido）

スペランカーチームの一員。

ユルゲンも一目置く程の能力を持つ。

2008 08 09 3:38

伝説 第1話

鳥の群れが頭上を越す。

もつすぐ目的の場所に着きそうだ。

仲間達の顔も、達成間近とあってかほこりんごうにも見える。

「今回の場所には何があるのでしうね？」

アルは、リーダーで師匠でもあるゴルゲンに問い合わせてみる。

「きっと私たちにとって、かけがえのないものがあるだろ。」

川沿いを歩く。

向こう岸に鹿の群れが見える。

そちらに向こう側は大きな山脈。

少し前までの険しい道が嘘のように、おだやかで優しい。

森に入り程なくして、出口のような光を抜ける。

「 ハハだ。」

ユルゲンが腕を水平に上げ、それを見るよつに促す。

そこには、空に突き刺さるよつなほど、大きな岩。

「これが、人間の持つてゐる神秘の力を引き出すと言つて伝えられて
いる遺跡だ。」

アルはその岩を見上げ、それをよつと呟つ。

「神秘の力？」

「そうだ。何かしらの意思が、この岩には存在する。

そして人は、その神秘的な力を得るためにこれを祀る。

素晴らしい世界を自然と共に過ごすために。」

ユルゲンもアルと同じようにその岩を見上げ、どこかしら感慨深そ
うに語る。

「で、おまはどこなんですかい？ 師匠？」

軽口を叩くのはイヴァン。その岩へ歩みより辺りを見回す。

「止めておけ。軽はずみな行動は命取りかも知れんぞ。」

そう忠告したのはギード。

気が付けば、シミターと呼ばれる長剣を持つた人間達が、男女関わらず取り囲んでいた。

伝説 第2話

不穏な雰囲気を察したギドは、腰に着けていた小銃に手をつける。

イヴァンはギドの言葉に気付き、とっさに岩から離れた。殺気が、美しい景色に似つかわしくないほど漂っていた。

ユルゲンは後ろを振り返り、静かな口調で言葉を発する。

「我々はドイツから来た。事を荒立てるつもりは微塵もない。突然の来訪、大変失礼した。」

依然緊張状態は続く。

アルは動搖しながらも戦闘態勢を取る。

「皆の者、シミターを今すぐしまいなさい。」

その声を聞くや否や、取り囲んでいた者達がシミターをおろす。

（なんなんだよ一体よつ…）

イヴァンがアルに小声でつぶやく。

アルはイヴァンのその一言で緊張と恐怖から開放された。

すると、人壁の間から一人の老人は現れた。
傍に寄り添つように黒髪の少女と一緒に。

「ようこそ、ユルゲン博士。お待ちしておりましたよ。」

「お久しぶりです長老。お元気そうで。」

「ほツほっほ、何年ぶりかのう。突然訪れるとはお前をんらしいわい。あいかわらず世界を飛び回つておるのか?」

「はい。この遺跡の事を調べれば調べるほど、関連づいた伝説が世界中にあるとわかりました。」

「こ」の岩には不思議な力がある。我々には到底たどり着けない神秘がある。

人の潜在たる、素晴らしい能力を引き出すとも言われてある。」

アルはふと黒髪の少女と目が合い、微笑んでみた。

黒髪の少女はその視線に気付いたらしく、恥ずかしそうに長老の足にしがみつく。

長老は少女の頭を撫で、母親らしき人物を呼び

「皆の者、ちと離れてもらえんかの?」

長老がやつ言つと、一部の武装した戦士を除き、少女と一緒に森へ消えて行つた。

「ゴルゲン博士。お前さん、気付いてあるかね？」

ユルゲンは何かを知つてゐるよつた素振りを長老に見せる。

「神秘の思想……ですか……？」

「やつじや。」このところの不思議な現象が、この岩を通じて伝わつてくるのだ。」

スペランカーチーム全員が岩を改めて見る。

「それに呼応してか、最近、星に乱れがあつてな……。」

「星の乱れ？」

「やつ。凶星のひとつが、禍々しく強く光を放つよつになつてな。

言ふ伝えられてゐる伝承が、現実のものにならつとしている。」

その場に残つている戦士の一人が長老に進言する。

「いけません。部外者に、この伝説をお話しては災いが起きます。」

長老はうつむきながら微笑み

「ここんじゅよ。ゴルゲンとは深く、長い間柄じや。」

不安そうな戦士達をよそへ、長老は続ける。

「あー、この辺に伝わる伝説をお話しようか。」

伝説 第3話

長老は、この遺跡に関わる伝説、伝承を語り始めた。

周りを取り囲む者達も、神妙な面持ちでそれを聞く。

アルには現実離れした御伽話にしか聞こえなかつた。

「全ての元凶はここにある。それを封印し続けるために我々はここにいる。」

セツラウトと長老は、並んで近づき、そして見上げた。

「凶星のひとつひとつをいつたけど、凶星つてほかにたくさんあるのかい？」

「うひ、長老に向かつてなんて口を利くんだ。」

軽いノリで話しかけるイヴァンに、ギドは睨み付けながら声をかけた。

「なんだよー疑問に思つたから訊いただけじゃネーか！」

顔を近づけてギドに突つかかるイヴァン。

「ちつとも、ふたつって言ってただる。読解力の無い奴だ…。」

飽きれかえるギド。それを聞いてセラヒ怒り出すイヴァン。

一人をイザコザを止めようと間にに入るアル。

「ほっぽ。凶星はふたつと、先ほど述べたが、凶星は他にもある。古代アステカにも存在していたとも聞いてある。ただ、世界を滅ぼしかねない強い力を持つふたつの星を、凶星と呼んである。」

「しかし、その禍々しいふたつの凶星にも救いがあるかもしけん。」

長老は振り返り、再び語り始める。

「ふたつの凶星の間にわずかに光る、星。
それを我々は、救星 と呼んである。
輝きは未だ暗い。だがわずかながら光を放つておる。
近い将来、凶星が輝きだした時
救星が強く光を放てば、世界を元凶から護ってくれるのかもしけん。」

「

気が付けば夕闇が包み込む。

鳥の群れが巣へ向かうのだろうか、森の方へ飛ぶ。

「さてと、久しぶりの客人じゃ。コルゲン博士御一考様をお迎えして宴と参らうか。」

護り人達は歓声を上げ、散らばっていく。

「うほ！宴かよ！酒酒！！」

「まつたくお前は能天氣だな…。」

「師匠。世界には色々な伝説があるんですね。」

アルはユルゲンに微笑みながら話しかける。

「そうだ。こうして伝説や言い伝えを大切にし、人は自然を享受する。」

そうすることによって人は変わらず、そして進化していくんだ。情報や悪意、欲望に踊らされない。それが自然なんだ。」

休息

神秘の遺跡を後にし、街に戻ったアル達。

ベッドで横になりながら、ノートにまとめたレポートを眺めている。

ギドとイヴァンは酒場に繰り出していた。

ユルゲンは、パソコンを使いチャットをしている。

ユルゲンは家族思いの人。

多分、家族との会話をしているのであろう。

どこかしら楽しげにも見える。

・ ・ ・

アルは思い出していた。

ふたつの凶星と、その間で密やかに輝く救星の話。

その意味は未だわからない。

宴の際、長老の傍にいた黒髪の少女の言葉が頭をよぎる。

(あたしもこいつか同じように旅に出るの)

まるで自分の運命を、幼心に語ったかのような言葉。

ノートを顔に被せ目を開じる。

「ほくもひしつと

これからもずっと旅を続けたいなあ」

アルがスペランカーを志したのは、八極拳の師匠でもあるコルゲンの影響。

門下生に冒険の話をよくしていたからだ。

コルゲンの話を聞くたびに、胸を躍らせ、時に感動していた。

コルゲンが考古学に精通していたこともあってか、アル自身、歴史の成績はすぐぶる良かつた。

同時に、強く、優しい師匠に憧れを抱き、八極拳の修行にも精を出した。

しかし、アルは子供の頃から体があまり大きくなく、成人を迎えた今でも子供に間違われたりする。

「師匠のように強くなりたい」

そう願つて修行に励んだ結果、かなりの実力者になった。

そして、ユルゲンの仕事を手伝つようになり、やがてスペランカーの道へ進む。

（もつと勉強しないとなあ…）

そう考えるうちに、アルは寝てしまった。

ギドとイヴァンが、酒場で大暴れしていたことも知らず…。

大学にて 第1話

帰国したアルは、コルゲンが籍を置いている大学に来ていた。先日行つた遺跡の研究の手伝いをするために。

ある程度作業も進み、休憩を取るために食堂へ向かっていた。

「アル！今回はどうこへ行つてきたの？」

アルに声をかけたのはエマ。この大学で学ぶ聰明な女性。前向きで明るく、誰から好かれる性格もある。

「やあエマ。今回は遺跡にまつわる伝説を勉強してきたよ。」「

「やうなんだ。いいなあコルゲン博士といつも世界中を飛び回つてさ。あたしも行きたいなあ。」「

一緒にいた女性がエマに声をかける。

「私は研究課題があるから行くね。」「

「ミシェール」めんよ。今度埋め合わせするからだ。」「

エマはその女性に申し訳なさそうに手を合わせ、女性も気にしないと微笑みその場を去つた。

「さつきの人は？」

アルがエマに訊ねる。

「あの子は短期留学で来ていて、森林に関する研究をしているの。」

アルは納得をしながらも、友達に失礼が無かつたか考えてしまった。

「でさあ、今度いつ行くの？あたしも連れてつてもらえるようユルゲン博士に言つておいて！」

「結構危険な旅なんだよ。何回危ない目にあつたか。今回だつて下手したら死んでたんだぞ。」

「うわあワイルドな経験したんだねー。あたしもドンパチしてみたいー！」

「バカ！映画みたいに綺麗に戦つたりしないんだぞ！…戦つた事はまだ無いけどね…。」

「大丈夫大丈夫！いざとなつたらあたしがアルを守つてあげる！」

好意的にも受け取れる言葉にアルは赤面した。

「なつー？これでもぼくは八極拳をやってるんだぞー！自分の身ぐらい自分で守れるよー！」

エマは笑いながら両手を後ろ手にし、アルの前を歩き出す。アルは小走りにエマを追いかける。

「あ、もう二回も同じことを聞かれてうんざりしちゃうか。」

食堂に着き、Hマと軽い食事をしながら旅の話をする。

興味深そうに話を聞くHマ。

アル自身と言えば、あの話はやつぱり理解できていなによつて、自分でなにを話しているかよくわかつていなかつた。

「よつアル！」の前はお疲れだつたな！お！Hマちゃんあいかわらず可愛いねー。」

イヴァンがパンを咥えながら一人のいるテーブルに座る。

「Jさんにまけイヴァンさん。ちよつどあの旅の話をしていたところなんです。」

「そうかそうか。で、Hマちゃんに俺の武勇伝を話したのか？
かつこよかつたよなあ俺。突然襲ってきた原住民をバッタバッタと倒して・・・。」

身振り手振りで大げさに話すイヴァン。それをエマは笑つて聞いている。

「イヴァンさん！嘘言わないでくださいよ！武勇伝って言つても酒場で暴れたことくらいでしょ！師匠にこつぴどく怒られたじゃないですか。」

「そつそつー。ギドが酔つ払つちまつてなあ。あいつ普段はクールぶつてゐくせに酔つ払つと陽気になるんだよな。」

アルは同意するよつにくすくすと笑っている。

「そんでもって店にいた客が暴れだして、ギドが止めに入ったら逆に襲われてな。その後大乱闘だ！」

Hマは身を乗り出して聞いている。

「あたしもその場にいたら一緒にケンカする…右ストレートしてやるんだ！」

「お、Hマちゃん頼もしいね。是非今度一緒に食事でも…。」

「申し訳ございませんが、丁重にお断りいたします。」

その言葉を聞いたイヴアンはがっくりと肩を落とした。
アルはおかしくて大きな声で笑った。

「そう言えば、その場にThe king of iron fist tournamentに参加していた方がいたんでしょ？」

アルはイヴアンに問いかける。

「そうそうー。TV中継で写ってた奴がいたぜー。名前はなんだつたっけか？」

街のおしゃれな酒場なのに赤い胴着着ててさ。場違いもいいところだ。

イヴアンは笑いながら話す。

「変な奴だつたけど、かなり強かつたぜ？ギドと一緒にだけやりあつてさ。

酔つ払っていたとはいって、あのギドを跪かせたんだからな。」

酒場での武勇伝で盛り上がる三人。

アルは時間を忘れ笑っていた。

大学への電話

大学の研究室に籠もるユルゲン。モニターを見つめ、難しい顔でキーボードを打つ。

(神秘の思想・・・。)

ユルゲンは、自分が調べた世界中に存在する言い伝えと、長老に聞いた伝説との関連性を繋ぎ合わせようと頭を悩ませていた。それはとてもなく大きなパズルを組み合わせるような作業だった。時折、自分の記したレポートに目を通してはため息をつく。

ドアをノックする音が聞こえ、ユルゲンは入室を促す。

「コーヒーをお持ちしました。」

女性の研究員がそれを手渡す。

「ありがとうございます。」

ユルゲンはそれを受けとり口にする。
一息つき、再び課題に戻る。
繋がっては途切れる。それの繰り返し。

どうにも繋がりが見い出せないユルゲンの元に、一本の電話がかか
る。

「先生、香港からお電話です。」

受話器を受け取り話しかけるユルゲン。

今日の仕事をある程度終わらせたアルは帰宅の準備をしていた。ユルゲンはアルを引き留め話かける。

「ギドが道場にいたら私の元に来るよう、伝えてもらえないか?」

「わかりました。ぼくも久々に道場で汗を流してきます。」

「私がいなくとも、しっかり学んでくるのだぞ。」

「はいー。」

道場に着き、久々に白い胴着に着替えた。

今日は子供達を教える日ではなく、ユルゲンは仕事で道場に来ない日でもあった。

しかし、熱心な道場生は自主的に修行に励んでいた。

ギドは同じ師範代である道場生と組手をしていた。

そこで学ぶ生徒達は、そこから何かを見つけ出すかのように正座で見つめている。

組手が終わるまで隅でストレッチをするアル。

やがて組手が終わると、アルはギドに声をかけた。

話を聞くや、同僚の師範代へ後を任せるように足早に更衣室へ消えて行つた。

一人の師範代が、アルに組手を交わすよう促した。

「久々の組手だ！」

わくわくするアルは、さらに入念にストレッチをし、組手に向かう。

「よしー！」

氣合を入れ、相手と対峙するアル。

相手に一礼をし、久々のこの雰囲気を噛み締めるように叫んだ。

「お願いします！」

東方の国へ

ユルゲンの依頼で、ギドは香港に来ていた。

ターミナルを後にし、タクシー乗り場へ向かつ。すると一人の青年がギドに声をかけた。

「ようこそ香港へ。」

「久しぶりだなシャオスイ。お招きありがとうございます。」

「いや、こちらこそお呼びだとして申し訳ない。ゆっくりしていっておくれ。」

案内された高級車に乗り込む2人。向かった先はとある中華街の一角。大きなビルの中。

ビルの警備員らしき、黒いスーツを着た長身の男が先頭を歩き、大きなドアの前まで同行する。

そのシャオスイがドアをノックし、その部屋に入る。迎えられた部屋には一人の老人が座っていた。

「」無沙汰しております、ワン先生。」

「おおギド、待つておつたぞ。まあ座ってくれ。」

ギドは用意された椅子に促されるように座る。

「ユルゲンは元気か？先日長老から手紙をもらつての。やつも招待したんだが、仕事の都合がつかなかつたようだな。」

少し残念そうな表情をしながらも、ギドに話しかけるワン。三人で酒を酌み交わし、談笑する。

しばらくして、神妙な面持ちでワンはギドに向つ。

「長老から聞いたよ。ユルゲンの研究が、凶星と結び付きがあることを。

一つの凶星が、日本に存在する。凶星が世界を牛耳ようと画策しておるようだ。」「

「それでだな、これじゃ。」

差し出された一枚の手紙。

その中には武闘大会の招待状と内容が描かれていた。

「ギド、君に来てもらつたのは他でもない。

我々、華橋の精銳と共に、この大会に出場してもらいたいのだ。ユルゲンには伝えてある。他流試合となるが、許可は得てある。」

「どうして私なんですか？」

「ユルゲンの推薦じや。」

納得いかないギド。

「では説明しようか。」

この大会の主催者は 三島財閥。

現在の頭主、三島一ハが、君も知つておらひ凶星の一つなじや。」

「…？」

「「」の伝説を調べているコルゲンにも魔の手が及ぶかもしれない。
もちろん君もそうだ。

そのためにユルゲンと、それに同行した者達に護衛を付けた。ユル
ゲンには伝えておらんがね。」

ワンは笑いながら酒に口をつける。

突然の言葉にギドは言葉が出ない。

一体なにが起「」のつとしているのか、まだなにも理解できなかつた。

「開催までまだ時間はある。

後でユルゲンにも香港へ来てもらつ手筈になつておる。

三島財閥の暴走を食い止めるよ「」、どつか我々の力になつていただ
きたい。」

ワンはギドに頭を下げる。

ギドは立ち上がり、頭を下げるのを止めるような仕草をした後、恐
縮しながらワンに答えた。

「私でようしければ協力いたします。」

ワンはにこやかな顔でギドを見つめ、シャオスイと田を合わせる。

「危険な事もあるだろ「」が、我々が責任を持つてお守りいたす。」

シャオスイは古い友人であるギドに、頭を下げ

「すまないな。祖父の願いを聞き入れてくれて。ありがとう。」

「気にするな。コルゲン師匠とワソ先生は、俺を育て、鍛え上げて下さった恩人だから。

それに応える事が出来て光栄だ。」

ギドは大会に向けて、ワンの主催する道場で修行を始める。

アルはイヴァンの応援するサッカーチーム、【ハノーファー96】の試合を観戦しに来ていた。

大声を張り上げ、サポーター達と共に歌い、チームを鼓舞する。エマは初めてのスタジアムの雰囲気に興奮気味だった。

ハノーファー96のFWがゴール前でパスを受け、DFと競り合いながらもシユートを打つ。

しかしボールはわずかに「ゴールの枠を捉えられなかつた。

「あ～！なんで決められないかなああのシユート！」

エマが悔しそうに拳を突き上げながら叫ぶ。

「まつたくだぜ！ほらボール取らんかい……ハノーファー――！」

イヴァンは柄の悪い野次を飛ばしながらも、チームに対する愛のチヤントを歌つていた。

アルは一生懸命声を出して応援していた。

サッカーはあまり詳しくないが、地元のチームを愛しているからだ。まさにハノーファー96は、アル達にとって家族のように大切な存在なのである。

そして歓喜の瞬間がやってくる。

ハノーファーのHースストライカーが、見事なゴールを決めた。

同時にアル達サポーターは大歓声。スタジアムが揺れ、そして響く。

「やったー！ゴールだよ『ゴール！』」
アルに抱きついて喜びを表現するエマ。
エマは感極まって涙ぐんでいる。

「やったねエマ…さすが我らのハノーファーだ！」
アルもさすがに興奮を抑えきれずにいた。

イヴァンは上半身裸になり、最前列に回っては「ゴールを決めた選手
に祝福の雄たけびを揚げていた。

そしてこれが決勝点となり、ハノーファー96は勝利した。

「いやあ気持ち良い試合だつたなアル！ビールがうまいぜー。
ビールを片手にアルの肩を組むイヴァン。

「本当ですよ！あそこで決めなきゃどうするんだって感じでしたか

「うわ！」

アルはかれた声で答える。

「明日は香港へ出発だしな。今日の勝利は俺うりにひとつでも素晴らしい！なつ！？」アルよ！」

「ギドさん香港へ行つて3ヶ月なんですね。元気かなあ？」

「あいつが元気じやない方が難しいわい！酒飲んで暴れてんじやねーの！？」

イヴァンはまさに勝利の美酒に酔いしれている感じに答えては笑う。興奮が收まりきれないHマは覚えたばかりのチャントを歌い、思い出したかのように話しかける。

「すゞく楽しかったなあ！なんかすゞこ空間だつたよ！また連れてつて下さいねイヴァンさん！そつそつ、あたしの就職祝いもね！」

「もちろんだぜHマちゃん！今度は一人でゆつくりスタンダード席で…。」

「

「申し訳ありませんが、丁重にお断りいたします。」

イヴァンはアルの肩に崩れるよひにそりに寄りかかった。アルはかれた声で笑っていた。

「あ、でも香港と一緒に連れてってくれたら考えるかも？」

動く

大学ではユルゲンが、一通りのレポートを終えて帰宅しようとしていた。

明日は香港へ旅立つ日。

早めに帰路に着こうと車に乗り込むその時だった。

「ドンー！」

ユルゲンはその音に驚き、後ろを振り返る。すると足元には黒ずくめの男が倒れていた。すぐ傍にはアジア系の男が数人立っていた。

「君達は何者だね！？」

八極の型を身構えるユルゲンに対し、アジア系の男達は腰を低くし、一人が静かな口調で答える。

「ユルゲン博士、我々はワン御大から貴方をお守りするようにと勅命を受けまして、このようご無礼をいたしました。どうかお許し下さい。」

「ワン先生から？」

ユルゲンは勅使の話を聞き、身の危険が迫っている事を知る。

「私に関わった人間は大丈夫なのか？」

「はい、ご安心下さい。ワン御大の勅命通り、この伝説に関わる全ての方に護衛をつけております。」

その後、勅使の一人の携帯電話が鳴る。

一言一言交わした後、ユルゲンに内容を伝える。

「ユルゲン博士、アルベルトさんとイヴアンさんを保護いたしました。今から我々と共に香港へ向かうよつお願いいたします。」

「同じように襲われたって事なのか…。無事なのか一人は?私の家族は?」

勅使は一人と家族の無事を伝えると、用意していた車にユルゲンと乗り込んだ。

「凶星…。動き出したという事か…。」

ユルゲンは改めて、調べている伝説が現実に近づいている事を知る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8210e/>

鉄拳2 Another Resurrection

2010年11月4日13時47分発行